



## 第3章●子どもと人間関係

千葉県立平山小学校教諭

広森 滋

---

船橋市立大穴北小学校教諭

新井 誠

# 1. 学校の人間関係



これまで、学校での子どもたちの人間関係は、一般の人々にとってブラックボックスであった。それが、「いじめ」（対友人の人間関係）、「体罰」（対教師の人間関係）ばかりがマスコミによって取りあげられてしまい、まるで学校での人間関係は、それしかないような印象を与えてしまっている。たしかに、そういった面もあるが、それが全てではないことも確かである。「モノグラフ・小学生ナウ」では、これまでにさまざまなアングルからこの問題にアプローチしてきている。たとえば、「ケンカ」（vol. 2-12）、「異性の友だち」（vol. 2-6・vol. 5-10）、「先生」（vol. 3-9・vol. 9-1）、「いじめ」（vol. 4-2）、「体罰」（vol. 6-1）などである。本節では、

これらの既刊の「モノグラフ・小学生ナウ」をもとに、マスコミが取りあげている側面とは別な面から、学校での人間関係を明らかにしていきたい。

さてここで、このテーマを明らかにしていく上で、鍵となる重要な現象がある。それは、現代の若者・子どもに共通する「軽さ志向」である。詳しくは以下にゆずるが、軽さ志向とは努力とか友情（人間関係の深いつながりとして）とかといった既存の価値を尊ばない新しい価値観である。この軽さ志向が子どもたちの人間関係に大きな影響を及ぼしているのである。そのようすを、学校での仲間関係の縮図ともいえる「ケンカ」からみてみようと思う。

## 🍌 ケンカをしない子どもたち 🍌

まず、図3-1は1か月間にケンカをした回数をたずねたものである。ここで図中1の「とっくみあいの激しいケンカ」を1度もしなかった子どもが、80%もいるのには驚かされる。しかし、昔から「とっくみあいのケンカ」は女子はほとんどしなかったので、その影響かもしれないと思い、図3-2の性差をみってみると、さらに驚かされる。図3-2の1「とっくみあいの激しいケンカ」をみると、女子で「1度もない」と答えている者はさすがに92%に達するが、男子でも69%に達する。さらに、ロゲンカはどうかというと、図3-1に戻り、3を見ていただきたい。やはり、ロゲンカも71%もの子どもが、「1度もなかった」と答えている。図3-2の性差

のほうをみても、男子で63%、女子で80%の者が、「1度もない」と答えていることがわかる。

これらの数値は、決して特別なものではない。日頃、教室にいて、今の子どもたちは「ケンカをしなくなった」という感じを強めていただけに、実感を裏づけられたように思う。一昔前まで、男の子は日常茶飯事のようにとっくみあいのケンカをしていた。ロゲンカ程度ならば、女子も含めて、毎日誰かがやっていたはずである。

図3-3をみると、さらにこの感を強めてしまう。図は、生まれてから今までのケンカの体験を性別ごとにみたものである。図中、右端の「1度もない」に注目していただきたい

図3-1 この1か月間にケンカをした頻度

	頻度 (%)				合計 (%)
	1度もなかった	1回くらいあった	2,3回あった	4回以上あった	
1. とっくみあいの激しいケンカ	79.9	10.4	6.3	3.4	
2. 1発なぐったり、叩いたり	71.5	16.9	6.6	5.0	
3. ひどいロゲンカ	71.2	16.3	7.8	4.7	
4. ロゲンカしたが次の日には仲なお	30.2	31.1	20.8	17.9	
5. ケンカを友だちにとめられた	73.1	17.4	6.9	2.6	
6. ケンカして友だちと気まずくなった	55.1	29.8	12.1	3.0	

(vol.2-12「ケンカ」より)

い。2の「ひっぱたいたこと」から5の「とっくみあいのケンカ」までの4つの項目で、男子の20%程度の子どもが「1度もない」と答えている。さらに、これらの数値に「1、2度ある」を加えると、2-5の全ての項目で60%を超えてしまう。なんと2割の男の子が、生まれてからこの方、ケンカらしいケンカをしたことがなく、大多数の男の子ですら、1、2回しかしたことがないのである。これでは、

「ケンカは男の子の勲章」とか「ケンカは子どもの仕事」とかいった言葉を廃語にしないでなければならないであろう。

なぜこれほどまでに、子どもたちはケンカをしなくなってしまったのだろうか。

図3-4はその理由を探ってみたものである。まず、理由の第一にあげられるのが、1の「本気になってケガをすといけないから」の63%（「とてもそう思う」と「少しそう思

図3-2 この1か月間にケンカをした頻度×性別

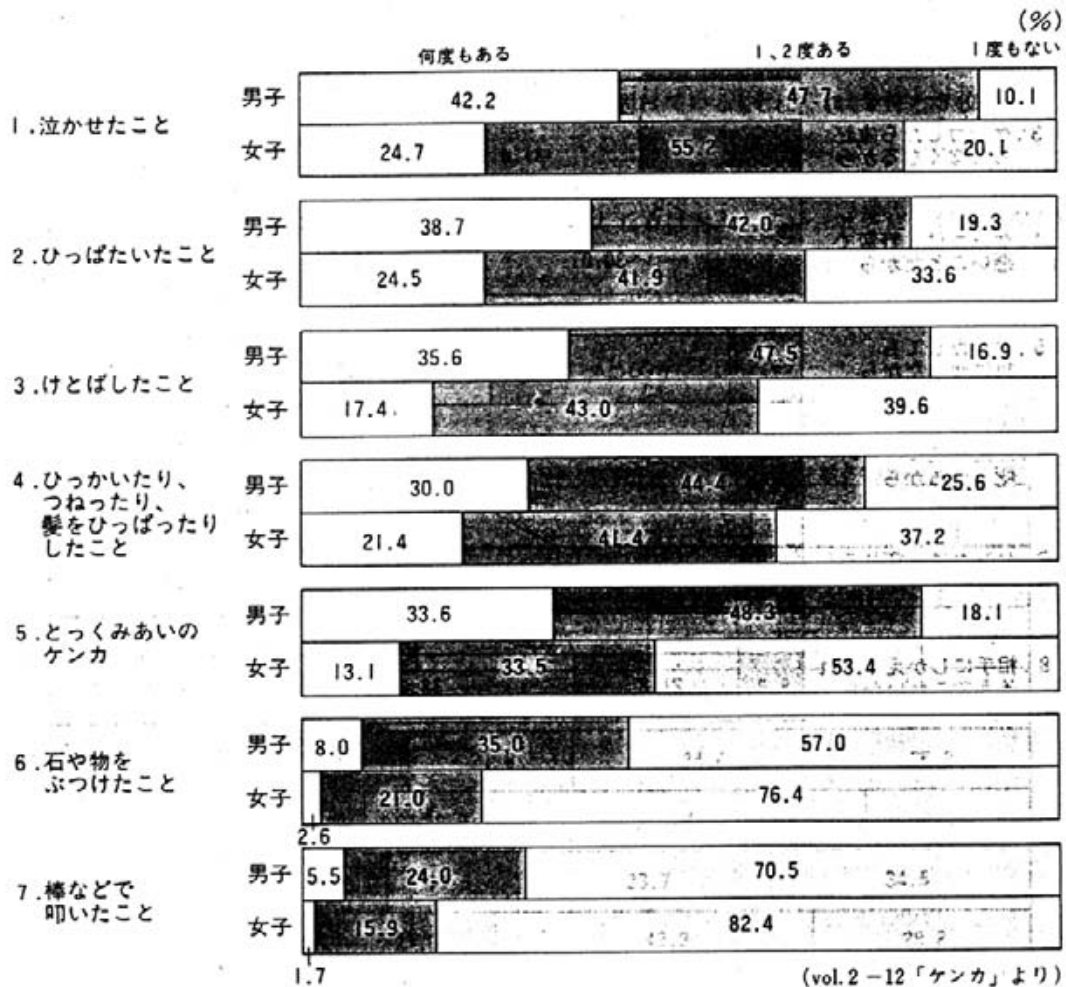
		(%)			
		1度もない	1回あった	2、3回あった	4回以上あった
1. とっくみあいの激しいケンカ	男子	69.0	15.5	9.9	5.6
	女子	91.8		5.0	-0.9 -2.3
2. 1発なぐったり、叩いたり	男子	63.4	20.7	8.6	7.3
	女子	80.3		12.7	-2.6 -4.4
3. ひどい口ゲンカ	男子	62.9	20.0	10.1	7.0
	女子	80.2		12.3	5.3 -2.2
4. 口ゲンカしたが次の日には仲なお	男子	26.3	31.6	19.9	22.2
	女子	34.5	30.5	21.8	13.2
5. ケンカを友だちにとめられた	男子	66.9	19.3	10.1	-3.7
	女子	79.9		15.3	-1.3 -3.5
6. ケンカして友だちと気まづくなった	男子	55.2	27.9	12.6	-4.3
	女子	54.8	31.9	11.6	-1.7

(vol. 2-12 「ケンカ」より)

う」を加えて)である。これは当然のことといえるかもしれない。次に、2の「本気になるほど腹のたつことがないから」の56%と、3の「ケンカしたら友だちでなくなるから」の53%が続く。この2と3の理由は、注目に値する理由である。子どものケンカは、本来、本音と本音のぶつかりあいであった。その中で、子どもは自分とは違う他者の存在を知ったはずである。ところが、本気になるほど腹

がたたなかったり、友だちでなくなるからといって自分の感情を抑えこんでしまったら、本音のぶつかりあいであるケンカなど起こるはずがない。まるでおとなが本音とたて前を使いわけるように、今の子どもたちは、本音のぶつかりあいを避けているのである。結果として、友だち同士の激しいケンカが減ったのと同時に、友だち間のつながりも浅く軽いものとなってきているのである。

図3-3 生まれてから今までのケンカ体験×性別



(vol.2-12「ケンカ」より)



図3-4 なぐりあいのケンカをしない理由

(%)

	とてもそう思う	少しそう思う	あまりそう思わない	ぜんぜん思わない
1. 本気になってケガを するといけないから	21.1	41.4	23.9	13.6
2. 本気になるほど腹の たつことがないから	20.9	34.7	27.6	16.8
3. ケンカしたら友だ ちでなくなるから	21.7	31.4	25.5	21.4
4. ケンカは、野蠻で 悪いことだから	12.8	30.0	33.6	23.6
5. ケンカしても 負けそうだから	9.9	31.4	38.0	20.7
6. 先生や親に 叱られるから	11.2	30.7	31.7	26.4
7. ケンカは、疲れるし バカらしいから	9.2	23.1	36.9	30.8
8. 相手にしかえしされ そうでこわいから	8.9	21.2	38.2	31.7

(vol. 2-12「ケンカ」より)

## 🍌🍌 軽さ志向の仲間意識 🍌🍌

学校内の仲間関係をケンカを手がかりとしてみてきたが、もう少し詳しく探ってみよう。

図3-5は、友だち同士の会話の内容についてみたものである。ここで2の「友だちのうわさ話」(54%)や4の「テレビ番組のこと」(43%)、5の「マンガ本のこと」(39%)などといった軽い内容の話が上位に多い。これに対して、7の「悩みや秘密」(32%)といった、ちょっと重い内容の話は敬遠されがちのようである。会話の内容からは、お互いに深入りを避けているとしか思えない。この辺からも、先のケンカの例と同様に、浅く軽い仲間関係を志向していることが読み取れる。

次に、異性間の仲間関係はどうなっている

のかみてみたい。表3-1と表3-2は、それぞれどんな異性と友だちになりたいか、たずねたものである。

表3-1をみると、男の子は第1に「誰にでも親切」な女の子と友だちになりたいと思っている。そして、「ユーモアがある」女の子が第4位と上位にランクされているのがわかる。表3-2をみても、女の子は「誰にでも親切」で「ユーモアがある」男の子と友だちになりたいと思っている(それぞれ、2位と3位)。ここでとくに、女子が「正直」や「しっかりしている」よりも「ユーモアがある」を上位にランクした点はおもしろい。まさに、軽くて楽しい子どもが異性からも好かれるのである。

図3-5 仲のよい友だちとの会話の内容

	よく話す	わりと話す	あまり話さない	(%) ぜんぜん話さない
1. 学校でのいろいろなできごと	26.0 23.9	39.1	27.7	9.3
2. クラスの友だちなどのうわさ話	20.7	33.4	34.7	11.8
3. 勉強やテストのこと	18.4	30.7	36.7	14.2
4. 人気があるテレビ番組のこと	14.1	29.2	40.5	16.2
5. マンガ本のこと	17.3	21.8	34.6	26.3
6. 学校の先生のこと	11.3	22.2	44.7	21.8
7. お互いの悩みや秘密	14.3	17.5	33.7	34.5
8. 親や兄弟のこと	7.9	21.0	42.3	28.8
9. 好きなタレントや歌手のこと	9.5	14.7	39.4	36.4

(vol.4-11「コミュニケーション」より)

表3-1 どんな女の子と友だちになりたいか(男子)

(%)

	とても・わりと 友だちになりたい	どちらとも いえない	あまり・ぜったい 友だちになりたくない
誰にでも親切	15.3 24.1 39.4	27.9	7.3 25.4 32.7
正直	14.0 22.8 36.8	29.6	7.8 25.8 33.6
(計画的に) しっかりしている	10.4 22.4 32.8	31.9	7.7 27.6 35.3
ユーモアがある	9.5 22.0 31.5	34.2	8.8 25.5 34.3
動・植物をかわいがる	10.4 18.1 28.5	37.1	8.4 26.0 34.4
頼まれればひきうける	9.4 19.1 28.5	37.1	9.0 25.4 34.4
ルックスがよい	8.8 15.7 24.5	37.1	8.4 30.0 38.4
スポーツが得意	9.0 15.3 24.3	36.3	10.1 29.3 39.4
勇気がある	7.4 14.4 21.8	39.2	9.7 29.3 39.0
勉強ができる	5.2 12.2 17.4	37.2	13.3 32.1 45.4
芸能界に詳しい	3.9 5.2 9.1	40.1	17.0 33.8 50.8

(vol.2-6「異性の友だち」より)



表3-2 どんな男子と友だちになりたいか(女子)

(%)

	とても・わりと 友だちになりたい	どちらとも いえない	あまり・ぜったい 友だちになりたくない
勇気がある	42.2    33.8 76.0	18.1	3.5    2.4 5.9
誰にでも親切	40.2    35.6 75.8	17.3	3.8    3.1 6.9
ユーモアがある	39.1    36.1 75.2	19.1	3.3    2.4 5.7
正しい	37.6    34.7 72.3	20.2	4.7    2.8 7.5
しっかりしている	32.9    35.4 68.3	23.7	5.7    2.3 8.0
スポーツが得意	33.3    33.9 67.2	24.9	5.0    2.9 7.9
動・植物をかわいがる	26.0    37.7 63.7	27.1	5.2    4.0 9.2
グループのきまりがある 頼まれればひきうける	20.8    32.7 53.5	35.9	7.1    3.5 10.6
ルックスがよい	14.4    29.4 43.8	40.7	10.9    4.6 15.5
勉強ができる	6.8    25.7 32.5	45.7	15.7    6.1 21.8
芸能界に詳しい	6.8    17.1 23.9	53.3	16.7    6.1 22.8

(vol.2-6「異性の友だち」より)

## 🍊 失われたギャング集団 🍊

さて、ここまで学校内の仲間関係のようすについてみてきたが、次に、放課後の仲間関係に目をうつしてみようと思う。

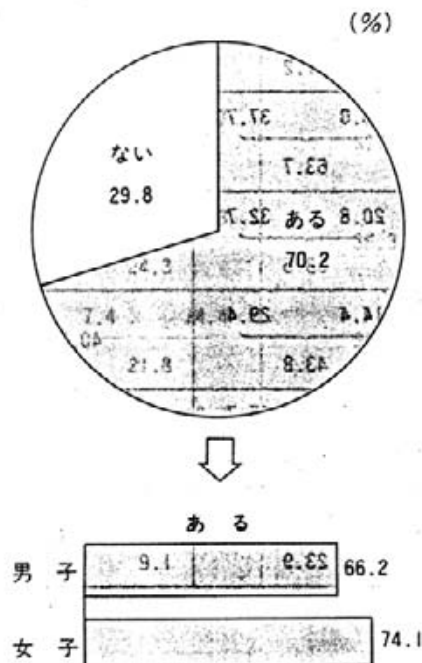
図3-6は、放課後の仲間集団（仲良しグループ）の有無をみたものである。図が示すように、70%の子どもが「ある」と答えている。しかし、図3-7の「仲良しグループの特徴」をみてみると、私たちが思っている放課後の仲間集団とは大分違うことがわかる。

グループ名があると答えた子どもは、わずか9%、おそろいの持ち物があるのは26%、合い言葉や暗号があるのは7%、秘密の遊び場があるのは15%、グループのきまりがある

のは7%という結果である。このように以前の子どもたちの集団が持っていた特徴は、まったく見られなくなってしまっている。やや古い児童心理学のテキストを開くと、「ギャング集団」とか「ギャングエイジ」という用語が出てくる。これらの用語が示す放課後の仲間集団は、まさにこの図3-7の特徴を持っていた集団なのであるが、もはやほとんど存在なくなってしまっているのである。

このことは、子どもたちの人間関係にみられる軽さ志向と、無縁とはいえない。グループ名や暗号やアジトなど共通の秘密を持つということは、それだけ深いつながりを意味す

図3-6 仲良しグループの有無

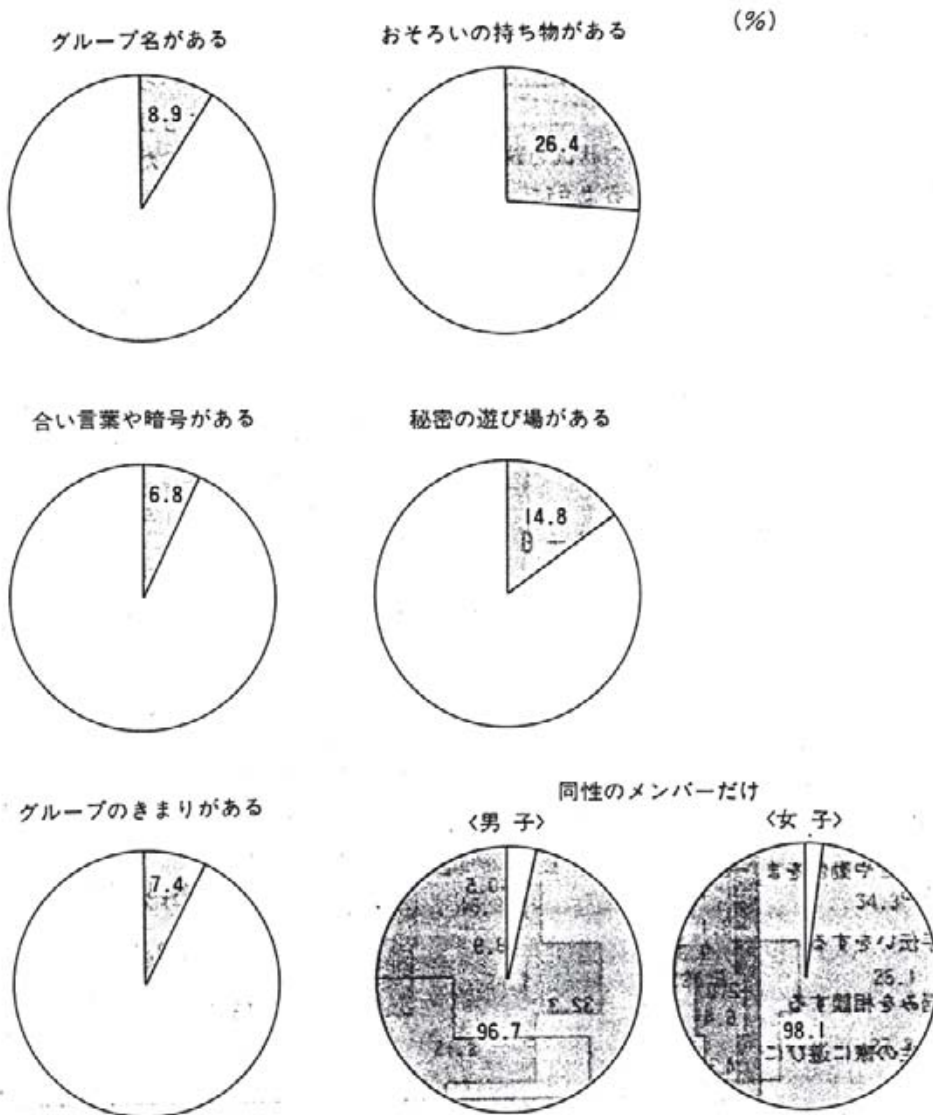


(vol.6-12「子どもの放課後」より)

る。しかしながら、今の子どもたちはこういった秘密めいた深いつながりを決して喜ばない。かえって負担にさえ思うかもしれないの

である。これでは、ギャング集団など生まれるわけがないのである。

図3-7 仲良しグループの特徴



(vol.6-12「子どもの放課後」より)

## 🍌 ユーモアのある先生が好き 🍌

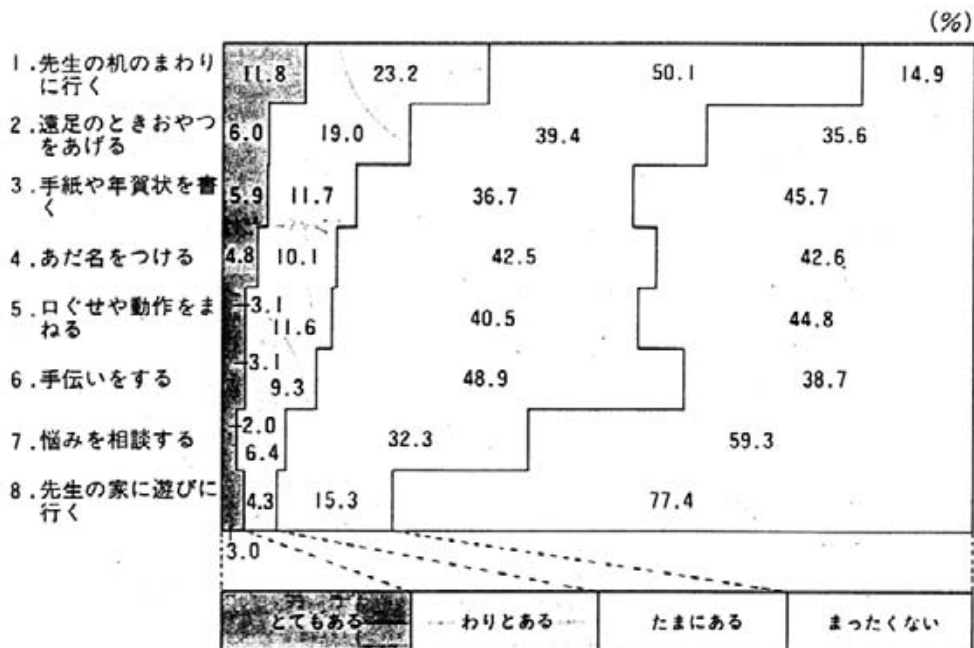
子ども同士の間関係がかつてないほど、浅く軽いものになってきたことがわかってきたと思う。では、学校でのもうひとつの人間関係である子どもと教師の関係はどうなっているのだろうか。

図3-8は、まず先生との接触の状況を調べてみたものである。図からわかるように、最も数値の高い1の「先生の机のまわりに行く」ですら35%（「とてもある」と「わりとある」を加えて）と半数を大きく下回っている。教育実践上、重要な意味を持つと思われる7の「悩みを相談する」にいたっては、わずか8%にすぎない。これらのデータから、子ど

もと教師のコミュニケーションはかなり希薄になってきていると言わざるをえない。教師サイドとしては、大いに反省する点であろう。

しかしながら、こういった結果が出てくる原因は、子どもの側にも存在しているのである。図3-9は、子どもたちにどんな先生に教えてもらいたいかをたずねた結果である。ここで一教師の本音としては、2の公平な先生(47%)や4の学習指導に熱心な先生(42%)、5の相談相手になってくれる先生(40%)などが第1位になってほしかった。ところが、ユーモアがあり楽しい先生が69%と断然トップである。子どもたちは、熱心な先生や子ども

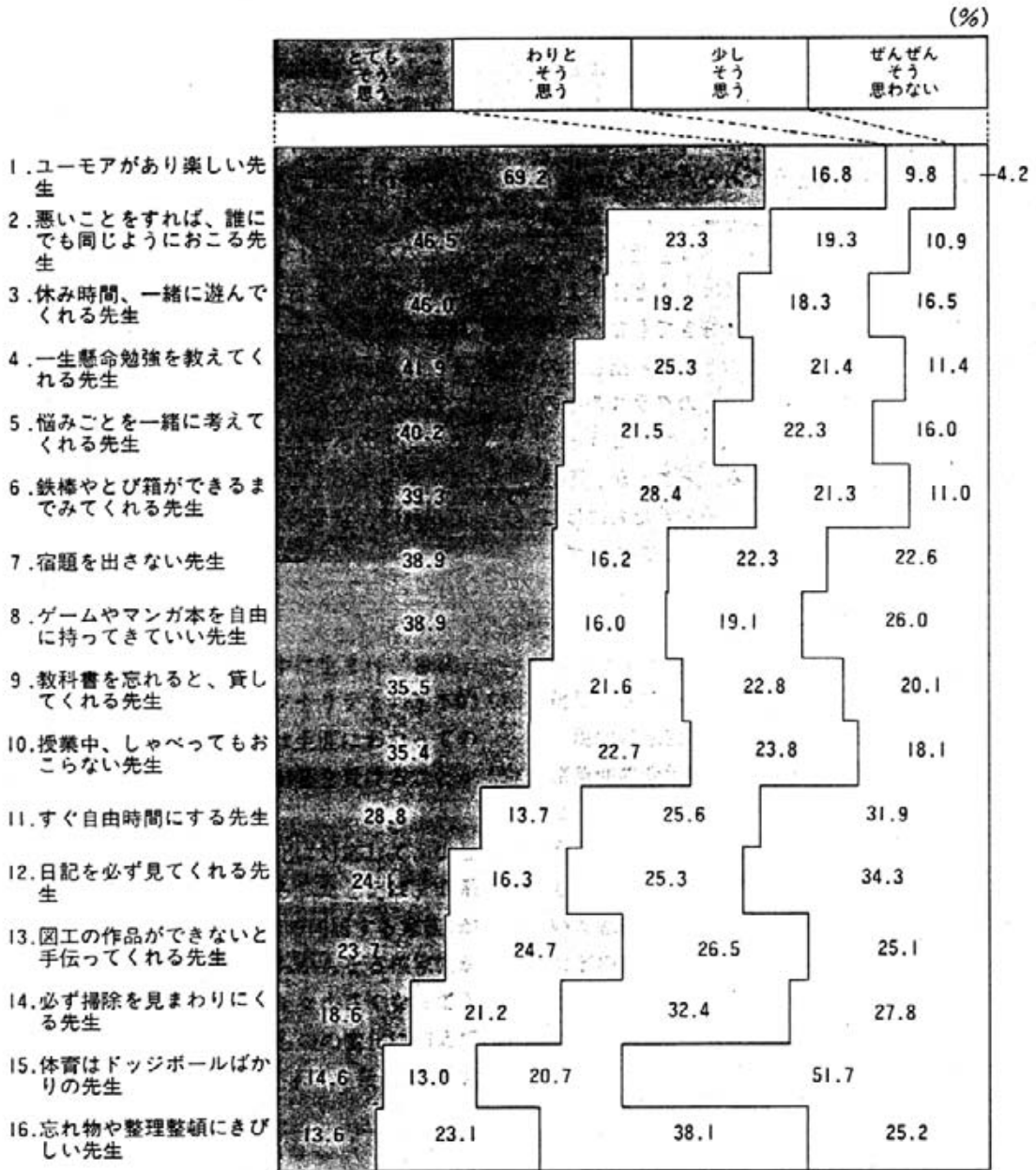
図3-8 先生との接触



とのふれあいを大切に先生よりも、軽く  
で楽しい先生を望んでいるのである。これでは、教師がいくら子どもとの深い人間関係を

望んでも、子どものほうから避けられてしま  
うことになるかもしれないのである。

図3-9 子どもが教えてもらいたい先生



(vol.9-1「先生」より)

## 🍊🍊 今、教室の中で起こっていること 🍊

あるクラスで、あまりにも薄い仲間集団の  
関係に業を煮やした教師が、子どもたちに本  
音を言わせようと試みた話を聞いた。はじめ  
のうちは、誰一人として本音を言わなかつた  
そうであるが、根気強く粘ったところ、一人、  
二人と話し始めたそうである。ところが、子  
どもの話を聞いていた教師は、やがて顔が青  
ざめてしまったのである。本音を話し始めた  
子どもたちは、口々に「私は、Aと仲がよい  
ふりをしているが、本当は好きでもなんでも  
ないの」といった内容のことを言い出したの  
である。これでは、明日からのクラスの中の  
人間関係はメチャクチャになってしまうと、  
その教師は恐れたのである。ところが、不思議  
なことに翌日になると、子どもたちにはこ  
れまでとまったく変わるところがみられず、

仲間関係も以前と同様であったというのであ  
る。

この教室の例は、本節で紹介してきたデー  
タが示す、子どもたちの軽く浅い人間関係の  
好例であろう。今の子どもたちは、決して仲  
が悪いわけではない。友だちもたくさんいる  
と思っている。しかし、その仲間関係は、お  
となの人間関係に似て、上辺だけのつきあい  
なのである。本音でぶつかりあうことや深く  
相手に立ち入ることを避けているのである。  
そして、上辺の仲のよさが何よりも大切な  
のである。したがって前述した教室の例のよう  
に、相手の本音がわかって、今まで通り仲  
よくやっていくことができるのである。考え  
てみれば、空恐ろしいことである。



## 2. 子どもにとっての両親



人は誰もが「家族」の中に生まれ、「家族」という環境の中で、パーソナリティの基本的部分を形づくり、ときには生涯にわたっての決定的ともいえる重大な影響を受けることがある。

その家族が、社会の変化に対応して、少しずつ姿を変えはじめている。たとえば、直系家族(親夫婦と子ども夫婦の同居する家族)が減少し、夫婦と子どもたちからなる核家族が増加し、家族のサイズも年々小さくなってきている。また、家族そのものの変化に加えて、都市化の進行やマス・メディアの発達など、家

族をとりまく環境や社会的諸条件も大きく変化してきている。

現代の家族とそれをとりまく環境や社会的諸条件の変化は、子どもの心身の成長や発達に、どのような影響をもたらしているのだろうか。ここでは親子関係に焦点をあて、子どもたちが今、自分の両親をどう評価し、どういう感情を抱きながら暮らしているのか。またどのように、両親のもとから巣立っていきこうとしているのかなどについて考えていきたい。

### 🍊🍊 父親・母親のイメージ 🍊

「厳父慈母」といわれたように、かつての父親はこわい存在であり、母親はやさしい存

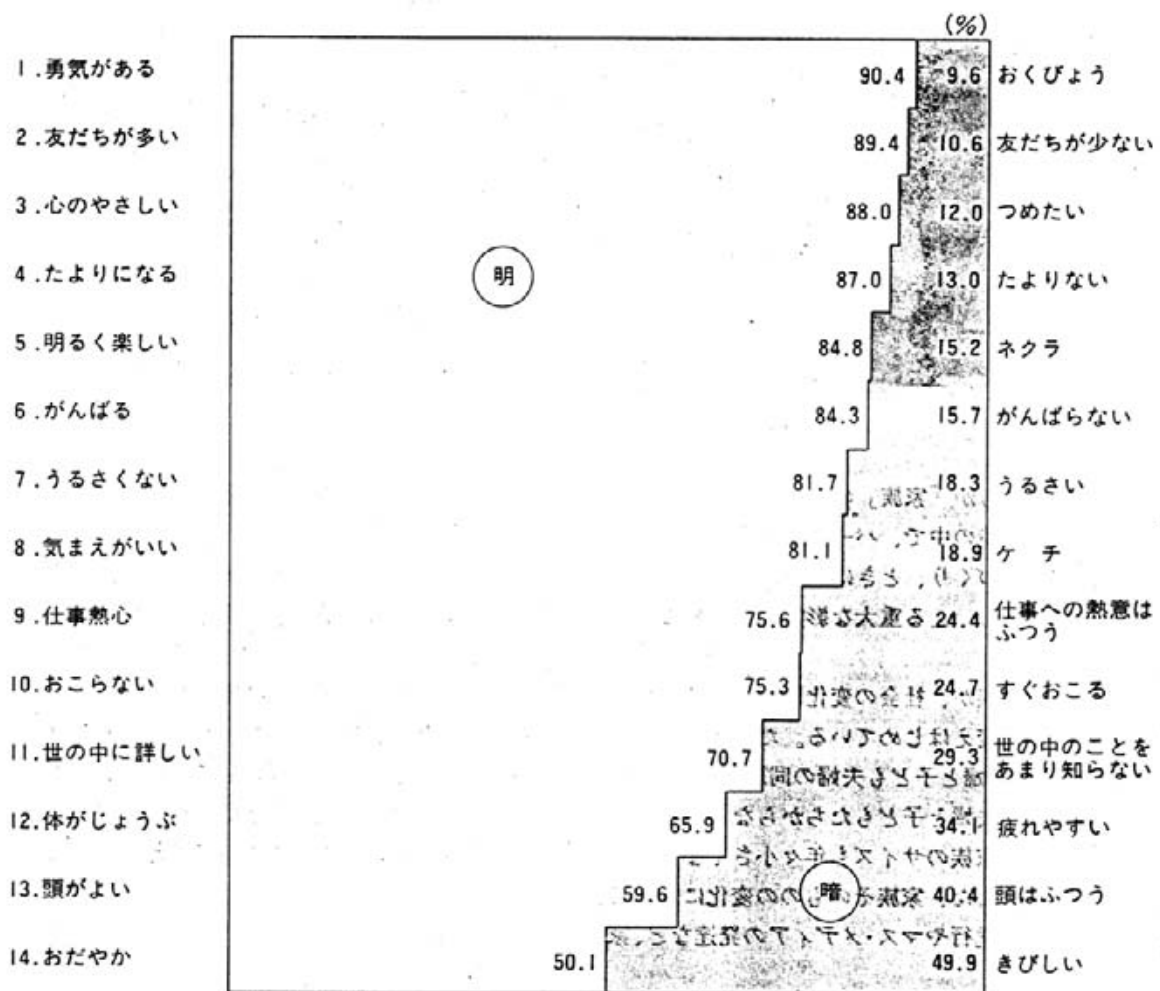
在であった。では今の父母は、子どもたちからどのように評価されているのであろうか。

まず父親に対する子どものイメージから探してみたい。図3-10から明らかなように、父親に対するイメージは全体として極めて明るく、肯定的にとらえられている。子どもたちの眼に映る父親は「勇気がある」「心のやさしい」「たよりがいのある」存在で、文句のない「満点マン」像を示している。下位に並んだ項目をみても、それほど頭が悪いとい

うわけではないが、ある程度のきびしさはもち合わせていると、ここでも肯定的な評価はほとんどゆるがない。

では、母親に対してはどのようなイメージを抱いているのだろうか。ここでは、「しっかりしている」から「おしゃれ」までの6項目について、仕事を持つ母親とそうでない母親にわけてたずねてみた。

図3-10 父親のイメージ



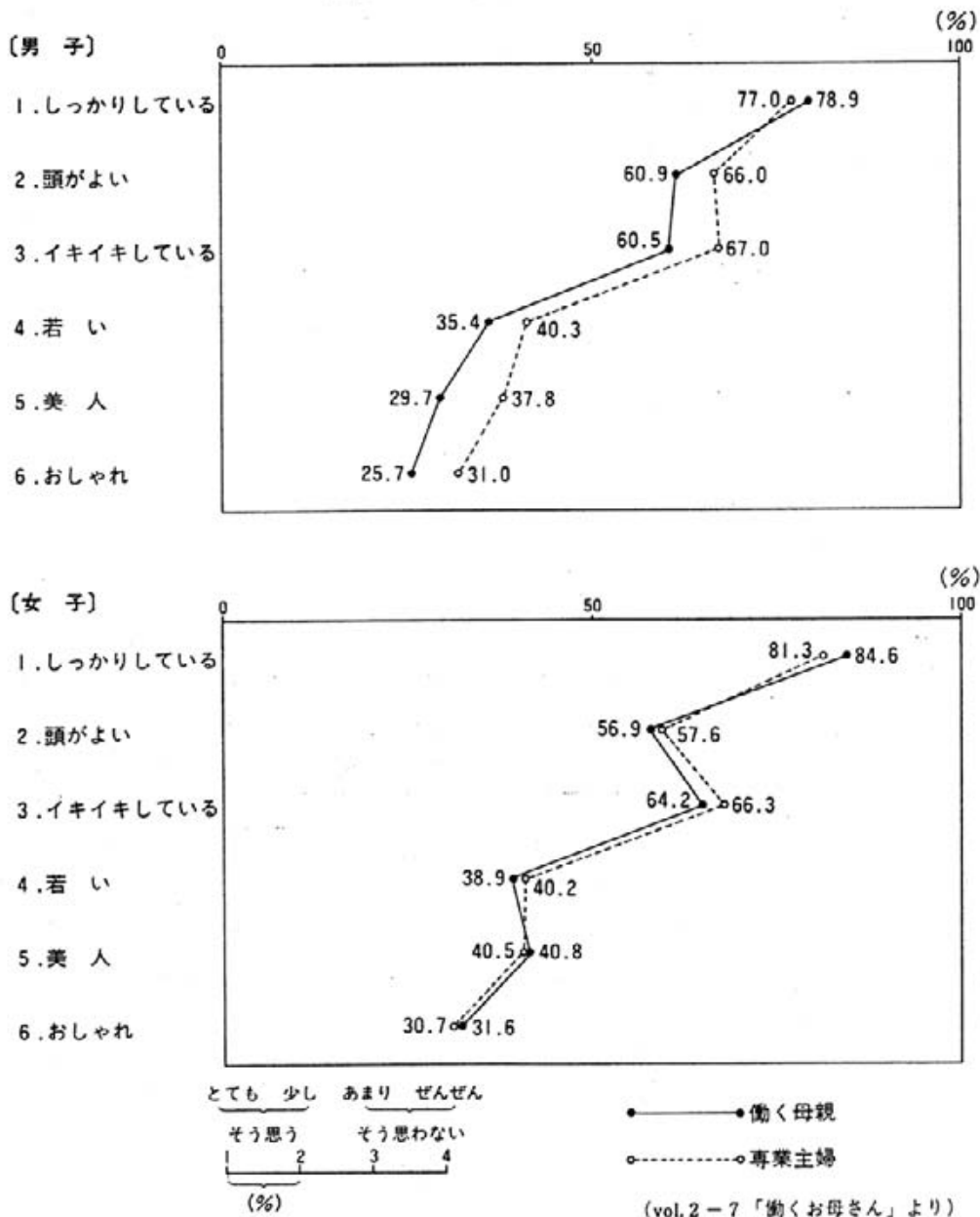
(vol.4-3「父親」より)

図3-11をみると、全体としては働く母親も専業の母親も、子どもたちからは「しっかりして、イキイキしている。そして頭がよい」とほぼ同じイメージを持たれている。現代の共働き家庭の子どもたちが、自分の母親の姿をどう受け止めているのか興味深かったが、結果は、母親が専業であろうと働いてようと、子どもたちの母親を見つめるまな

ざしは変わらなかった。おもしろいのは、女子のほうが男子よりも、働く母親へのイメージがよいことだ。自分たちの将来像と重ね合わせて評価しているのかもしれない。

次に、図3-12では両親をどのくらい好きかたずねてみた。思春期から青年期にかけては第二反抗期であり、両親への感情や態度も次第にネガティブなものになっていくとされ

図3-11 母親のイメージ

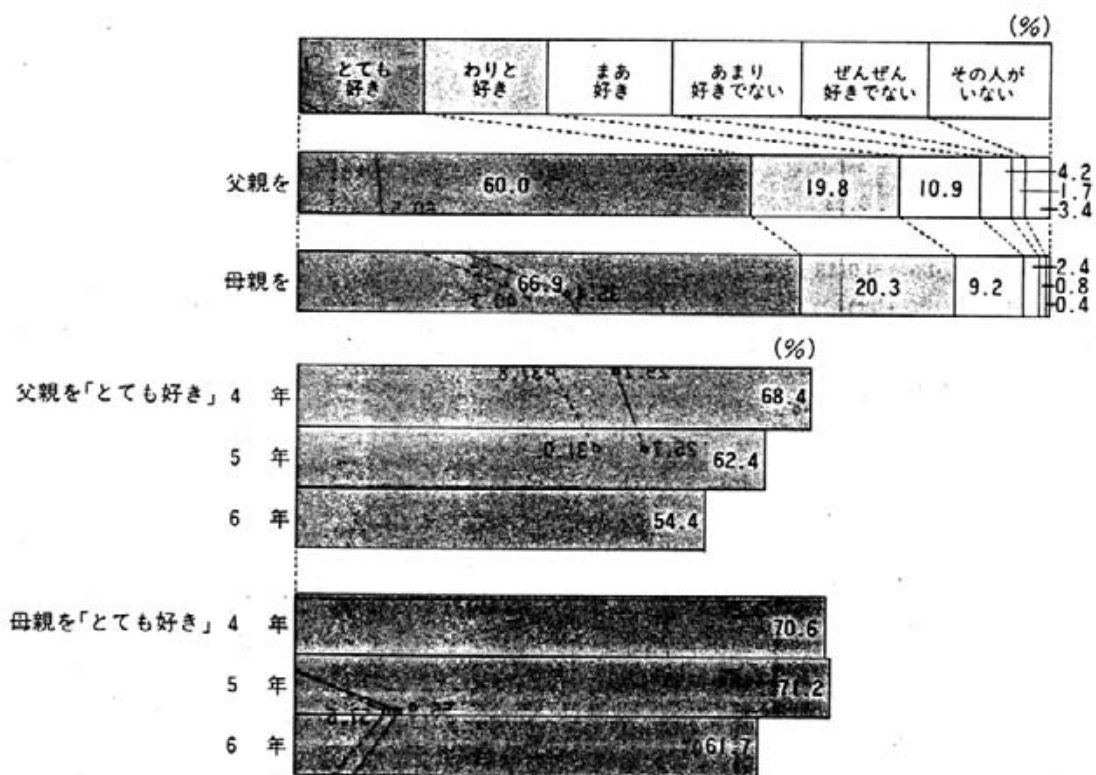


る。この点を見ようとした図3-12によれば、両親を「とても好き」な子は父親については60%（男子56%、女子64%）、母親を「とても好き」な子は67%（男子56%、女子78%）と、大きな割合を示す。父親と母親とでは母親のほうが好かれ、かつ男子より女子のほうが「両親を好き」な子が多い。この数字は「とても・わりと・まあ好き」まで含めると、父親で

91%、母親で96%にも達してしまう。

図の下に「とても好き」な子の割合を学年別に示した。父親については学年を追って68%、62%、54%と低下し、母親についても71%、71%、62%と低下する。このあたりに第二反抗期のシッポが見えた感じもしないではない。

図3-12 両親を好きか



(vol.7-10「スキンシップ」より)

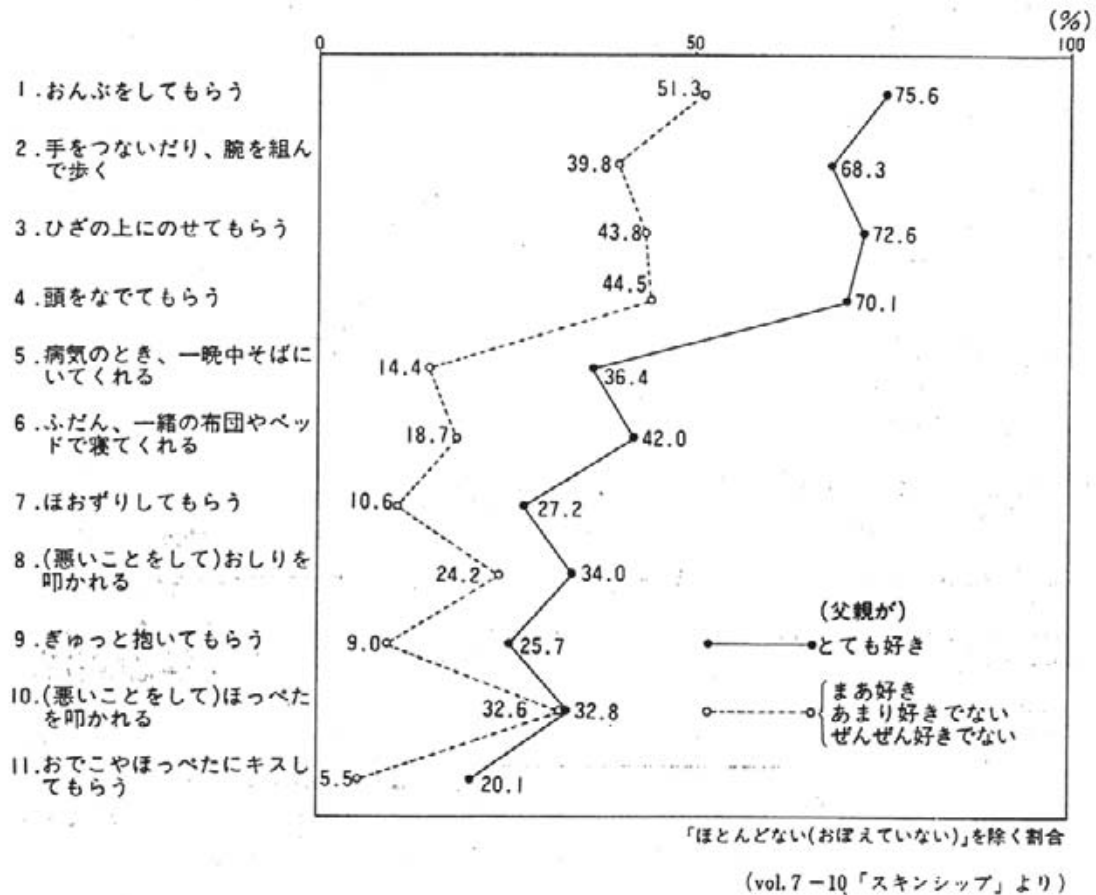
## 🍌🍌 親子のきずな 🍌🍌

父親や母親は、子どもたちからかなりよい評価を受け、好かれていた。両親へのこのような気持ちは、幼いころに親から受けるスキンシップから生まれてくる部分も大きいのではないかと考えた。そこで、スキンシップに

関する11項目について、スキンシップと父子関係、スキンシップと母子関係について調べた結果が、図3-13、図3-14である。

図3-13が示すように、父親が「とても好き」な子は、そうでない子に比べ、「おんぶを

図3-13 父親とのスキンシップ×父子関係

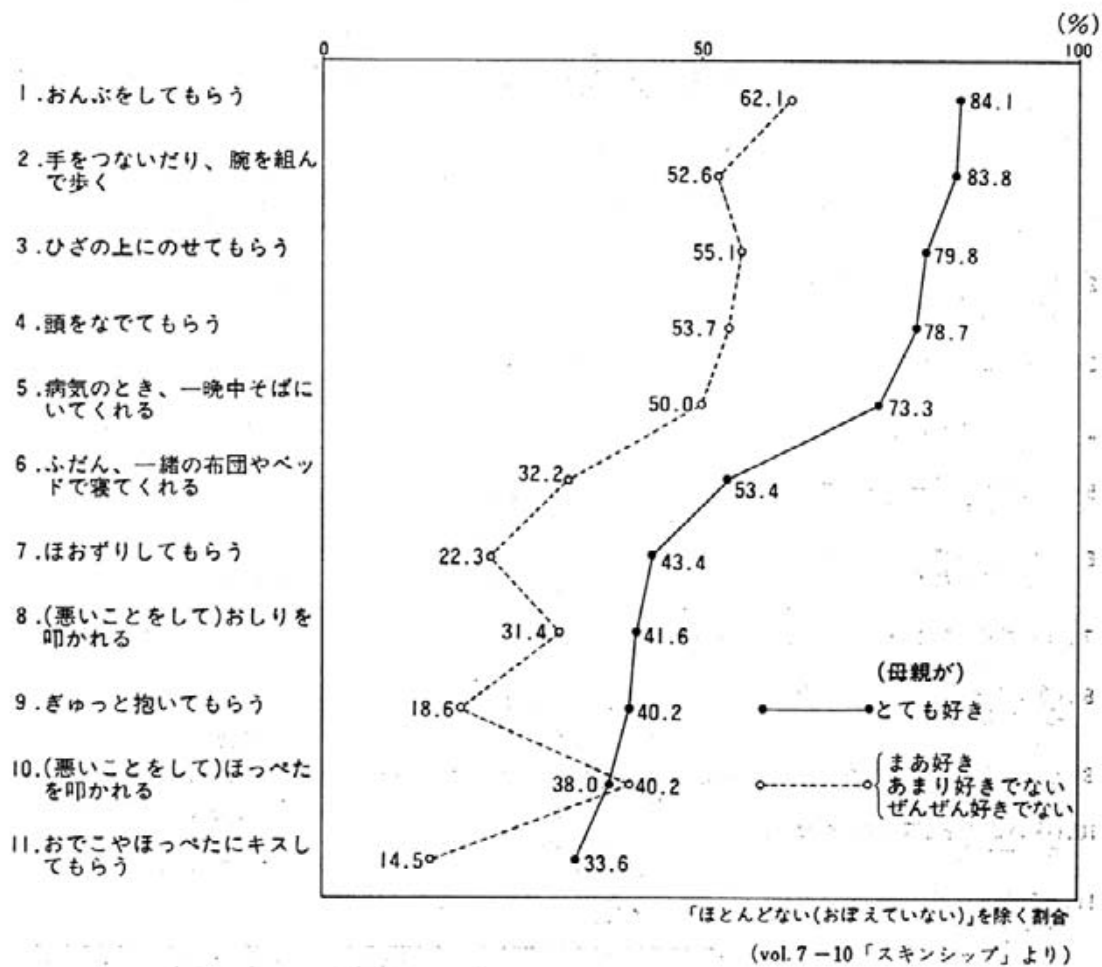


してもらおう」「手をつないだり、腕を組んで歩く」などのスキンシップをより多く受けていることがわかる。11項目の中で差がないのは、10の「(悪いことをして)ほっぺたを叩かれる」である。同じ叩くでも、8のおしりなら、叩くことによって父子関係が生まれるようである。スキンシップと母子関係については図3-14からわかるように、父親の場合と

同様のことがいえる。

このような結果をみると、親子のきずなは、親から子どもへのスキンシップや世話→という矢印が、父親や母親を好きという感情を生み、それが逆に子から親への愛情の矢印を生み、それが親⇄子という相互作用の下で親子関係という信頼と愛情にみちた人間関係を生ずるのではないかと考えられる。

図3-14 母親とのスキンシップ×母子関係





## 🍌🍌 親と子のコミュニケーション 🍌🍌

小学校高学年の子どもたちを担当すると、「最近うちの子は学校のことを何も話してくれないんです」「親の言うことに口答えをして困ります、どうしたらいいでしょう」などの悩みや相談をよく受ける。

そこで図3-15では、両親とどの程度話をするのかをたずねてみた。父親とは60%、母親とは84%が「とてもよく・わりと話す」と言っており、こちらの子想以上に話をしているように思える。ただ「とてもよく話す」を例にとると、図は省略したが、父親の場合、学年を追って32%（4年）、24%（5年）、21%（6年）と低下し、母親でも59%、52%、52%となって、1年ごとに子どもたちが親に口を閉ざしがちになる傾向はみえている。

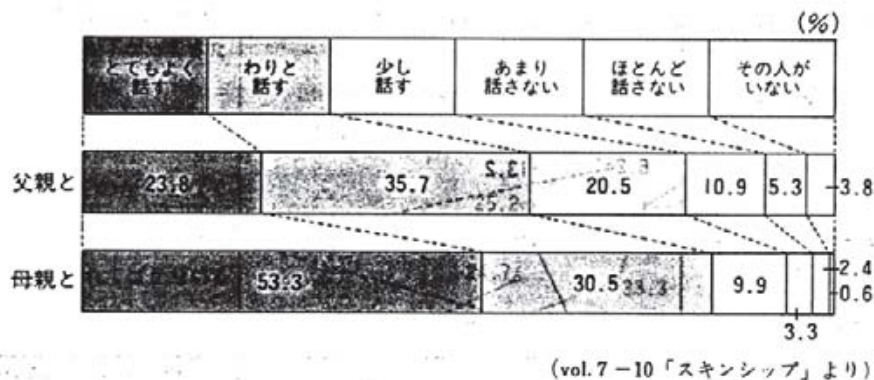
では、どんな話の内容なのかというと図3-16が示すように、父親・母親に関係なく一

番多いのが、「学校でのできごと」（父親42%、母親63%）であり、次に、父親との場合は「プロ野球などのうわさ」（39%）、母親との場合は「勉強やテストのこと」（51%）となっている。

ふだん仕事で忙しい父親が、思っていたよりも子どもたちと話をしていることが明らかになったが、さらに、子どもが困ったときに誰に相談するかについてもたずねてみた。図3-17にあるように、「お金を落としてしまった」から「好きな女の子（男の子）ができた」までの8項目のような問題が生じたときは、父親よりも母親に相談することが多い。そして母親からの助言にはかなりためになることが多いと言っている。

何かあったとき、子どもたちは母親と相談することが多かった。逆に親の目から見て、

図3-15 両親との対話



子どもに問題があるとき、どちらのほうか叱る割合が多いのだろうか。それについては表3-3のように、父親よりも母親のほうが口うるさいという子どもが8割を占める。

口うるさいとは思いつつも、子どもたちは、図3-18から明らかなように、母親のほうが「担任の先生の名前」や「仲良しの友だちの名前」を知っているし、「今、悩んでいること」も知っていると思っている。

子どもとの接触量が多く、子どもたちからかなり好意的な評価を受けている父親の姿が

示されてきたが、やはり母親のほうが子どもたちとのかかわりが多く、心の結びつきも強いようである。外に出て働く母親の姿が一般的になってきつつある中で、母親のがんばりが伝わってくるようである。

こうしたデータを見る限り、かつての権威を持って家庭をリードした父親像が影をひそめつつあるのは疑いようのない事実である。

心やさしい父親が増加し、父親らしさ、母親らしさのラインがほやけ、父母の同質化が進みつつある感触を受ける。

図3-16 父親・母親と話すか

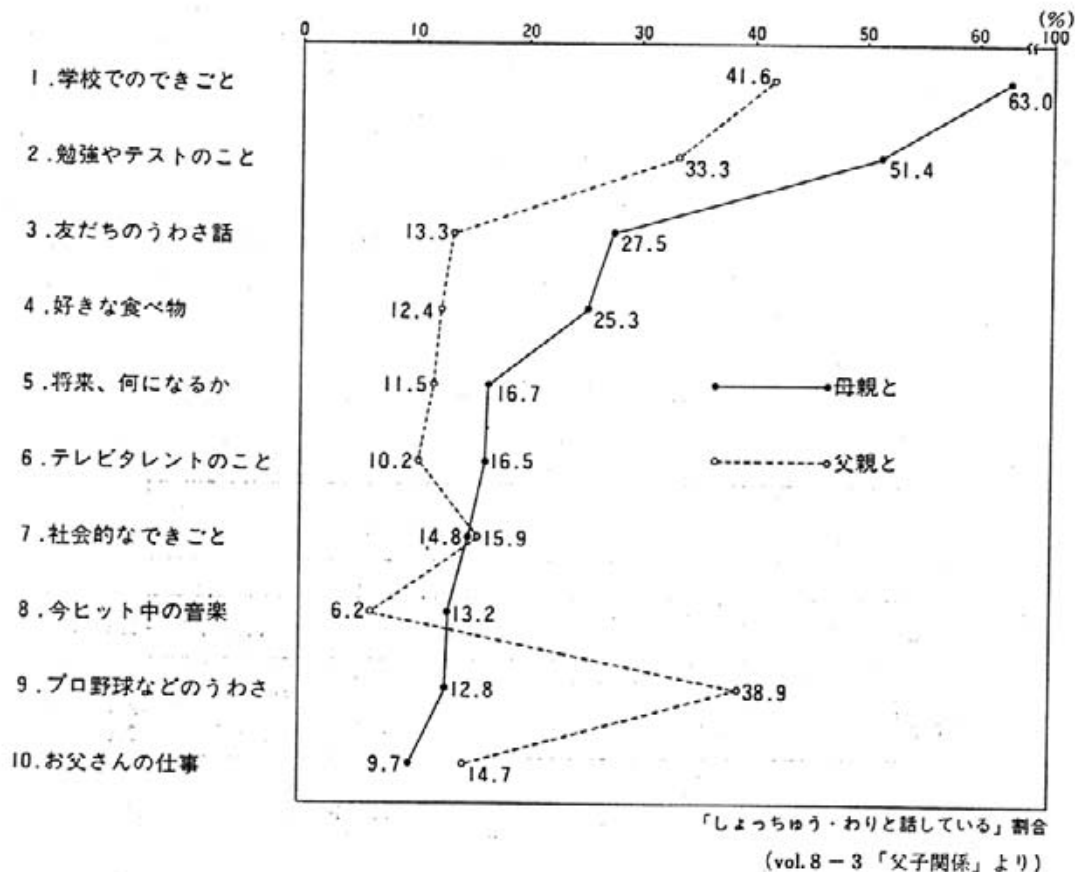
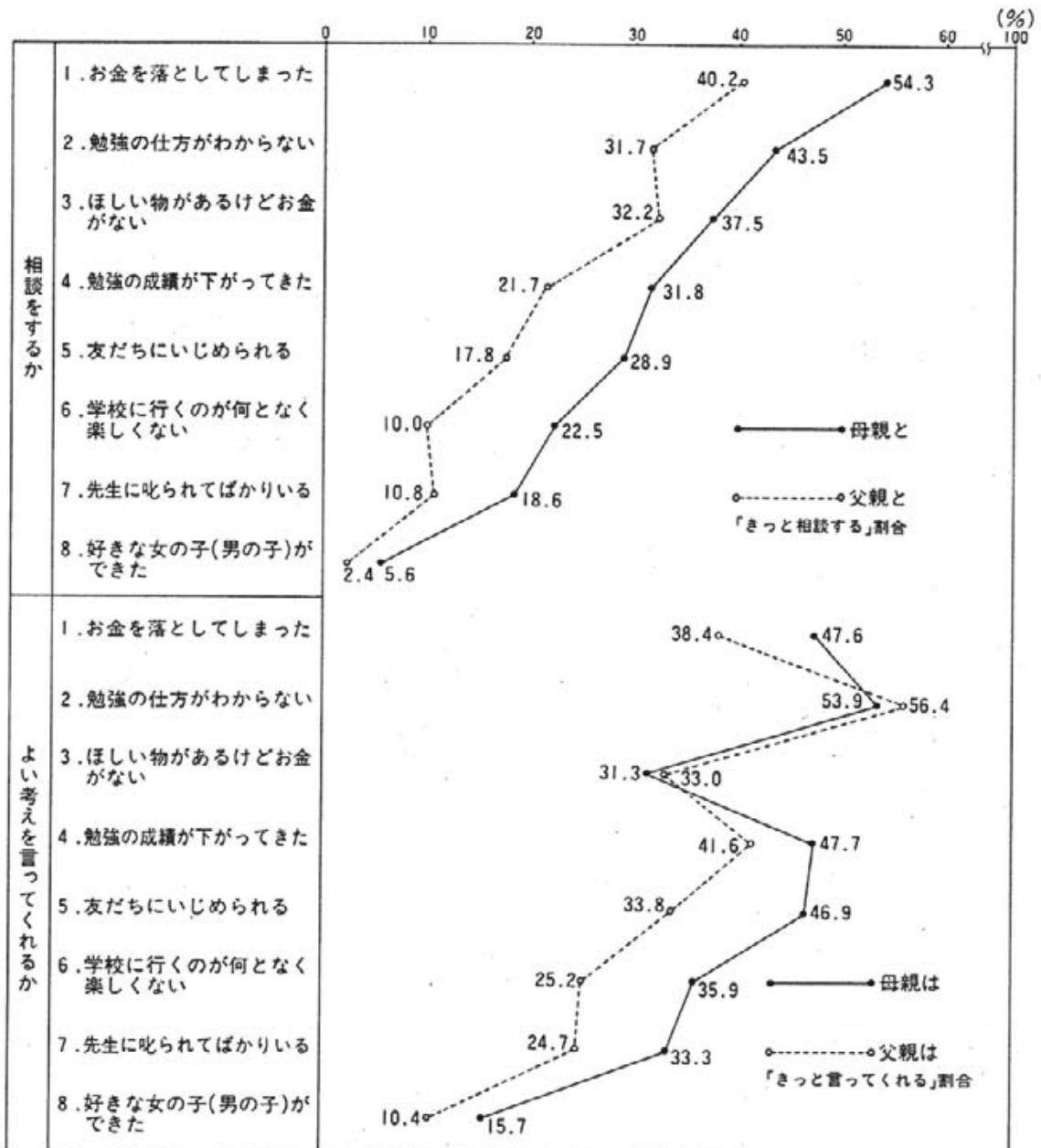


図3-17 相談をするか・よい考えを言ってくれるか



(vol.8-3「父子関係」より)

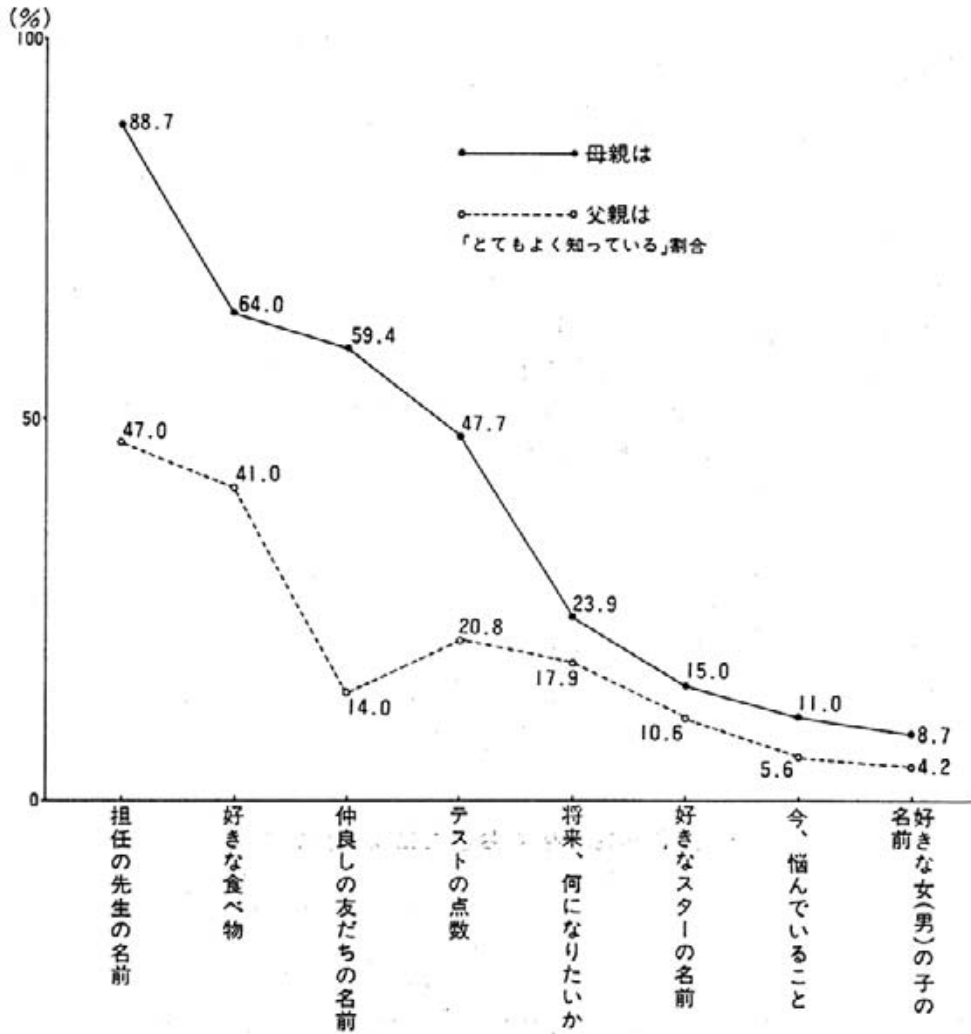
表3-3 父親と母親のどちらのほうがうるさいか

(%)

	だんぜん お父さん	どちらか いえば お父さん	どちらか いえば お母さん	だんぜん お母さん
テレビばかり見ているとき	5.9	18.8	49.8	25.5
	24.7		75.3	
家で手伝いをしないとき	4.7	13.4	57.9	24.0
	18.1		81.9	
机の上がちらかっているとき	8.0	15.3	47.7	29.0
	23.3		76.7	
テストで悪い点をとったとき	5.8	12.2	58.8	23.2
	18.0		82.0	
家で勉強をしないとき	6.9	10.6	54.2	28.3
	17.5		82.5	
朝、歯をみがかないとき	5.1	11.1	58.1	25.7
	16.2		83.8	

(vol. 8-3 「父子関係」より)

図3-18 自分のことを知ってくれているか



(vol.8-3 「父子関係」より)

## 🍌🍌 子どもの自立と親のかかわり 🍌

今までみてきたデータからは親と子のコミュニケーションが十分保たれ、好ましい親子関係を維持していることがうかがえる。心やさしく、物わりのよい父親と母親が子どもを「保護」という役割を十分果たしていると思う反面、もうひとつの役割である子どもの「自立」を促進させるという役割も果たせているのか、ここでは子どもの自立と親のかかわりについて、さらに親子関係に接近してみたい。

図3-19は、子どもの中にある「成長欲求」をみようとした結果である。図が示すように、「早くおとなになりたい」子はわずかに34%にすぎず、全体の3分の2は今のままか、もっと子どもだったころに戻りたいという。子どもたちの成長欲求が弱くなった傾向は、折にふれて指摘されるものの、こうした結果をみているとやはり気になる。

そこで、親からのスキンシップや子どもから親へのアタッチメント、母親の就労形態などが成長欲求とどうかかわるのか、さらに考

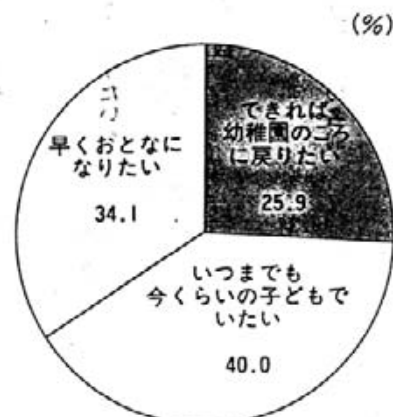
察を進めていきたい。

まず表3-4は、スキンシップと成長欲求とのかかわりである。表が示すように、成長欲求の弱い者(幼児期に退行したがっている者)は、母親とのスキンシップ体験が多い傾向がうかがわれる。また同様に表3-5によれば、親への愛着や依存を示している子のほうが、幼稚園時代に戻りたがっている傾向が見いだされる。

ただし、そうした過度のスキンシップが子どもを心理的に退行させ成長欲求を抑えるのか、逆に退行的な子どもがいつまでもスキンシップを受け入れるのかは、明白ではない。おそらく、その両方の作用が働くものと思われるが、このことは逆にわれわれに子どもを育てる作業のむずかしさを痛感させる。

本節の最後に1つの興味深いデータを紹介したい。図3-20である。図をみると、「早くおとなになりたい」という成長欲求の高い子は、フルタイムの子ども>パートタイムの子ども>専業主婦の子どもの順に、44%、

図3-19 早くおとなになりたいか



(vol.8-2「働くお母さん(3)」より)



35%、31%と次第に低下している。働く主婦たちの積極的な姿勢が子どもの中に反映しているのかもしれない。

親と子の間は密月からスタートしなければならない。そのために、親と子の心理的なきずなを形成する乳幼児期に十分なスキンシッ

プをすることが必要ではあるが、子どもを自立させ、おとなにしてゆくためには、発達段階のどこでそうした接触を減らしていくのか、打ち切っていくのか、また一方で、父母の自立へのしつけの役割等々、今の親子関係にはまだまだむずかしい課題があるようである。

表3-4 母親とのスキンシップ×おとなになりたいか

(%)

スキンシップの種類	おとなになりたいか		
	できれば幼稚園のころに戻りたい	いつまでも今くらいの子でいたい	早くおとなになりたい
おんぶをしてもらう	74.2	80.7	77.7
手をつないだり、腕を組んで歩く	83.2	78.5	73.9
ひざの上にのせてもらう	80.2	75.2	71.1
頭をなでてもらう	81.2	74.0	69.4
病気のとき、一晩中そばにいてくれる	69.1	68.8	67.0
ふだん、毛織の布団やベッドで寝てくれる	52.5	47.7	46.4
(悪いことをして)ほっぺたを叩かれる	35.4	37.6	43.8
(悪いことをして)おしりを叩かれる	43.3	40.9	34.9
ほおずりしてもらう	43.6	36.9	33.3
ぎゅっと抱いてもらう	40.7	35.1	30.6
おでこやおほっぺたにキスしてもらう	29.9	27.3	27.9

「ほとんどない(おぼえていない)」を除く割合  
(vol.7-10「スキンシップ」より)

表3-5 親へのアタッチメント×おとなになりたいか

(%)

(A)	おとなになりたいか		
	できれば幼稚園の ころに戻りたい	いつまでも今くらい の子どもでいたい	早くおとな になりたい
外で会うと「お父(母)さん」と声をかける	58.3 >	55.0 >	53.1
おつかいに、喜んでついて行く	57.1 >	51.4 =	51.4
もっとゲームなどを一緒にしてほしいと思う	56.8 >	40.5 <	45.3
親が授業参観に来るのはうれしい	52.9 >	48.1 >	46.9
もっとおしゃべりがしたいと思う	37.2 >	26.1 <	31.2
雷や地震があると親のいる部屋へとんで行く	16.6 <	23.7 <	24.3
その日のできごとをかたっぱしから話す	31.7 >	27.1 <	29.7

(B)

なんべんも起こされないと起きられない	30.2 >	27.7 >	26.6
学校へ行きたくないと思うことがある	17.7 >	8.1 <	10.1
親から言われてしかたなく食べるものがある	16.6 >	13.3 >	11.7
必ず「おやすみなさい」を言う	82.2	81.0	82.9
大声で「ただいま」と言う	64.2	62.7	61.2
悪い点のテストでも、必ず見せる	76.6 <	77.0 >	70.8
勉強でわからないことがあると親にきく	70.8 >	69.7 >	66.0
宿題などが終わると親に見せる	22.4 >	17.6 <	20.0

「いつも・わりとそう」の割合  
(vol.7-10「スキシップ」より)

図3-20 早くおとなになりたいか×就労形態

	できれば 幼稚園のころに 戻りたい	いつまでも 今のくらいの子ども でいたい	早くおとなに なりたい	(%)
1.フルタイムで働く母親 の子ども	25.1	31.4	43.5	
2.パートタイムで働く母 親の子ども	23.5	41.5	35.0	
3.専業主婦の母親の子ど も	27.3	41.5	31.2	

(vol.8-2「働くお母さん(3)」より)

